



日本音楽集団

PRO MUSICA NIPPONIA

創立35周年記念
第157回定期演奏会
The 157th Regular Concert

コンポーザーズ・プロジェクト・シリーズII

池辺晋一郎氏からのメッセージ

Composer's project series II : message from Shin-iciro Ikebe

■主催

特定非営利活動法人日本音楽集団

〒151-0073 東京都渋谷区笹塚3-17-1滝沢ビル302

TEL.03-3378-4741 FAX.03-3376-2033

ホームページURL <http://www.bekkoame.ne.jp/ro/promusica>

E-Mail promusica@ro.bekkoame.ne.jp

■助成

文化庁・日本芸術文化振興会
舞台芸術振興事業
(財)花王芸術・科学財団



Arts Plan 21



芸術文化振興財団

- 一、竹に同じく - 15本の管のために (1979年) 池辺晋一郎作曲
Shin-ichiro Ikebe : Almost a bamboo... for 15 bamboo pipes
[笛] 西川浩平・竹井誠 [竜笛] 中村香奈子 (助演)
[笙] 高原聰子 (助演) [箏] 西原祐二
[尺八] I 宮田耕八朗 II 三橋貴風 III 米澤浩 IV 水川寿也 V 添川浩史 VI 加藤秀和
[烏笛] I 田村法子 II 黒澤有美 III 徳野礼子 IV 久本桂子
[指揮] 田村拓男

- 二、情報転写IV - 5人の三絃奏者のための (1999年、委嘱・初演) 土屋雄作曲
Takeshi Tsuchiya : Information transcript IV for 5 Sangen players
[細棹三味線] I 箕田司郎 II 杵家七三 III 坂口美香 IV 山崎千鶴子
[太棹三味線] 工藤哲子
[指揮] 田村文生

- 三、雨のむこうがわで - 4人の打楽器奏者のために (1978年) 池辺晋一郎作曲
Shin-ichiro Ikebe : On the other side of rain for 4 percussionists
[打楽器] I 尾崎太一 II 黒坂昇 III 望月太喜之丞 IV 白杵美智代

休憩

- 四、めぐるかたち - 邦楽器アンサンブルのために (1999年、委嘱・初演) 池辺晋一郎作曲
Shin-ichiro Ikebe : The shape of gyration for Japanese instruments
[笛] 竹井誠 [尺八] I 三橋貴風 II 添川浩史
[三味線] 杵家七三 [琵琶] 田原順子
[箏] I 吉村七重 II 山田明美 [十七絃] 宮越圭子
[打楽器] I 望月太喜之丞 II 白杵美智代
[指揮] 田村拓男

- 五、ボレロ (1928年) モーリス・ラヴェル作曲・(1987年) 池辺晋一郎編曲
Maurice Ravel = Shin-ichiro Ikebe : Bolero
[笛] I 西川浩平 II 竹井誠 [笙] 高原聰子 (助演) [箏] 稲葉明德 (助演)
[尺八] I 宮田耕八朗 II 米澤浩 III 水川寿也 IV 加藤秀和
[胡弓] 多々良香保里 [三味線] 杵家七三 [琵琶] 落合和美
[二十絃箏] I 熊沢栄利子 II 桜井智永 III 城ヶ崎美保 IV 早川智子 V 嶋崎光代
[十七絃] 大島菜穂子・中垣雅葉
[打楽器] I 黒坂昇 II 石井佳直 (助演) III 白杵美智代
つづみ 尾崎太一 大太鼓 田村拓男
[指揮] 池辺晋一郎

コンサートによせて

池辺晋一郎



邦楽器との付き合いかたが、この30年ほどでさまざまに変化してきた。初めての邦楽器作品（「雲烟-2面の箏、十七絃と弦のために」）が1970年だから、これはほとんど僕の作曲家歴マイナス数年である。はじめ、邦楽器が怖かった。一音の余韻がいつまで経っても消えない。やっと消えても、その後の無音がひどく「強い」状態で、次の音を書きたいが何かにはね返される感じがした。こわごとと邦楽器に寄り添い、その機嫌を伺いつつ作曲したように、顧みている。そののち、邦楽器をできるだけ即物的に捉えようとする時期がやってくる。僕の邦楽器への「反抗期」だ。次にグローバルな視点でのエスニックなもの、ネイティヴなものへの興味と、邦楽器へのそれとを共存させようという時代になる。とはいえ、インドやエジプトの楽器と箏や尺八が、僕にとって同じであるわけがない。共存は試みであり、努力にすぎなかったろう。今夕の2曲「雨のむこうがわで」「竹に同じく」はこの時期だ。

そして今。僕は邦楽器に対して恬淡としているように思う。邦楽器も、またピアノもチェロも、それぞれの歴史と伝統を背負っており、僕たちはそれらの到達点にいるわけではない。歴史も伝統も、そして僕たちも、生きた日々の中にいる。「ボレロ」など近代フランス音楽の邦楽器アンサンブルへの編曲という委嘱に応じたのも、この心ではなかったか。こう書いてくると、日本音楽集団と僕との関係は上記第三の時期からか、と今あらためて感じる。第一、第二の時期に、集団のために書いていたらどんな曲になったろうか、と考えるもみるが、過去に対し「もし」を言っても始まらない。同様に、今後についての言及も空しい気がする。今夕のプログラムについて話すことにしよう。

「雨のむこうがわで」は、1978年、集団の打楽器奏者たちによる「グループだだ」のために書いた。邦楽の打楽器を中心に、雨を連想させる「音の粒」の音楽を意図した。しかし初演後は、邦楽の枠を越えて広がり、国の内外のさまざまな打楽器グループにより、演奏されている。全音刊。CDはカメラータ。

「竹に同じく」は1979年。日本音楽集団の委嘱作品。日本の管楽器はほとんどが竹であり（もちろん「ホラ貝」のような例外もあるが）、楽器を「筒」と捉える。洋楽器では、穴をすべて塞いだ、すなわちその楽器の長さの音を「閉管」と呼ぶが、邦楽器では「筒音（つつね）」。そして「筒」という字は、「竹」と「同じく」ではないか。「鳥笛」までを含む15本の「竹」が、風であり水であり鳥であり、つまりは自然であることを想って書いた。

「めぐるかたち」は、今回の委嘱新作。めぐるのは音。形（フォルム）。楽器法そのほか。僕の裡（なか）で生まれ渦まくものを自由に遊ばせ、それを写し取る、といった気持ちでの作曲であった。今年は例年に増して多忙で、オーケストラ曲3つ、合唱組曲2つ、室内楽曲が数曲、加えて毎週NHK大河ドラマの音楽を書き、映画も3本、毎月のように芝居の仕事…という具合だった。この新作に挑むのは至難。苦しんだ。

「ボレロ」は1987年、KINGのCD「ボレロ・ジャパネスク」に、サティ、ドビュッシー、フォーレの曲などとともに編曲して収めたもの。仕事をした当初、実は照れていた。が、時を経て、これも邦楽器の一つのシーンだと割り切れるようになった。気楽に楽しんでいただきたい。レコーディングの版より少し編成を小さくしている。

土屋雄君は、東京音楽大学の僕のクラス、そしてIRCAMなどで研鑽を積んだ。一方、大学の副科で三絃を学んだはずだ。新しい方向性と伝統的なものとの双方に関心と経験をもっている。それゆえに、今回の新人作曲家としての最適の人物と考えた。その未来を併せて、今夕をおおいに楽しみである。

以上のもろもろ、本当は何ひとつ解説は要らないと思いつつ書いた。邦楽器のコンサートであろうが、オーケストラであろうが、僕にとって何も変わらない。

池辺晋一郎プロフィール

1943年生。1971年東京芸大大学院修了。池内友次郎、矢代秋雄、三善晃、島岡譲の各氏に師事。1966年日本音楽コンクール第1位。以後音楽之友社作曲賞、ザルツブルグTVオペラ祭優秀賞、イタリア放送協会賞2度、国際エミー賞、尾高賞2度、毎日映画コンクール音楽賞3度、日本アカデミー賞優秀音楽賞7度など。

主要作品:交響曲Ⅰ～Ⅶ、ピアノ協奏曲Ⅰ～Ⅱ、ヴァイオリン協奏曲、チェロ協奏曲、オペラ「死神」「秩父晩鐘」「耳なし芳一」「おしち」「じゅごんの子守唄」、バレエ「いのち」「動と静」ほか管弦楽曲、室内楽曲、邦楽器作品、合唱曲、歌曲、ミュージカル、モダンダンス作品など多数。付帯音楽分野では、映画「影武者」「楢山節考」「うなぎ」「瀬戸内少年野球団」、TV「黄金の日」「八代将軍吉宗」「元禄繚乱」の音楽など。舞台演劇では文学座、俳優座、民藝、無名塾、東京演劇アンサンブル、青年座、東宝、松竹、明治座など約350本。

随筆集・対談集などの著書も多い。TV「N響アワー」、FM「芸術ジャーナル」などにレギュラー出演。水戸芸術館、紀尾井ホール、笠懸野文化ホールなどの企画運営委員、宮崎県立劇場などの顧問、横浜みなとみらいホールのアドバイザー。

(社)日本作曲家協議会会長、東京音楽大学教授。

池辺晋一郎邦楽器作品表

- 雲烟(うんえん) 2面の箏、十七絃と弦のために 1970
歴(れき) 尺八、2面の箏と十七絃のために 1971
紡ぐ(つむぐ) 二十絃箏のために 1971
累(るい) 5×4箏群のために 1972
音楽(おんがく) --箏と詩の交錯 1973
凍る(こおる) 箏のために 1977
雫が....(しずくが...) 尺八、2面の箏と十七絃のために 1978
雨のむこうがわで (打楽器4) 1978
竹に同じく15本の管のために
(竜笛、笙、箏、尺八6、篠笛2、鳥笛4) 1979
騒る(かげる) 十七絃箏のために 1979
はじめのうた 三絃のために 1980
志都歌(しづうた) 架空の日本舞踊のための音楽
(箏、篠笛、テープ) 1980
琉流累譜(るるるいふ) 尺八、2面の箏と十七絃のために 1980
曙から、そして曙へ 2面の箏と十七絃のために 1982
天のために地のために 琵琶とチェロのためのデュオ 1985
天点譜(てんでんぷ)
(篠笛、尺八3、三絃、琵琶、箏3、十七絃、打楽器2) 1986
謡謡譜(ようようふ) (尺八2、箏3、十七絃) 1988
凜凜譜(りんりんぷ) (独奏尺八、独奏三絃、独奏箏、尺八2、三絃2、箏2、十七絃) 1988
悲-Tristesse 箏とアルトフルートのために 1989
晨震譜(しんしんぷ) (箏3、十七絃) 1990
沙(さ) 箏と太鼓のために 1990
おしどり(箏、尺八) 1992
三色董練習曲(バンジー・エチュード) (三絃、箏、十七絃) 1993
振烈譜(れつれつぷ) (三絃、コントラバス、打楽器) 1993
梢にて 二十絃箏のために (二十絃箏独奏) 1995
ポピー・エチュード (尺八、三絃2、箏2、十七絃) 1997
たどるかたち (尺八、三絃、箏) 1997
响(しょう)のかたち (箏2、琵琶) 1998
土のかたち (和太鼓アンサンブル) 1998
めぐるかたち (箏、尺八2、三味線、琵琶、箏2、十七絃、打楽器2) 1999
そのほか、オペラ「耳なし芳一」、ダンス「多毛留」ほか邦楽器を含む作品多数。

作品について 土屋 雄

5人の三絃奏者のための作品。
私が音楽を創造する時、それは西洋、東洋の音/楽器に限らずその興味の対象は、様々なレベルにおけるコミュニケーションの形態である。

今回の作品では、私にとって日本の楽器の中で一番慣れ親しんできた三絃を5本用いることで、その非常に豊かな表現力を最大限に引き出し、さらに各々の奏者の関係性、つまりアンサンブルの可能性の追及により新たな緊張感を作り出すことを目的としている。

この度の演奏会で新作を発表する機会を与えていただいた日本音楽集団及び関係者の方々に心より感謝いたします。



土屋 雄プロフィール

1997年東京音楽大学大学院修士課程修了。作曲/理論を有馬礼子、池辺晋一郎、西村朗、湯浅譲二の各氏に、三絃を杉浦弘和氏に師事。また、IRCAMでコンピュータ音楽、電子音響を学ぶ。1993年から1997年まで作曲グループ「現在の音楽」の活動。1996年第13回現音作曲新人賞入選。1997年第66回日本音楽コンクール作曲部門入選。1998年CDMC委嘱作品「SYNC」がパリと東京で初演。NHK-FM等でも紹介されている。また電子音楽分野での活動としては野平一郎、松平頼暁作品等のプログラミング、電子音響を担当するほか、IRCAMのシンポジウム等で、主にCommonLispを用いた作曲プログラムを中心に研究するなど、音楽とテクノロジーについて積極的に取り組んでいる。

<現代邦楽展望～「集団」の窓から>

長廣 比登志

「現代邦楽」のもとめたものが二つある。一つは「音色」^{おんしよく}。もう一つは「奏法」。現代邦楽は、結果的には古典邦楽にない音色をつくり、あるいはあたらしい音色を付加した。別の見方をすると、楽器が潜在的に内蔵していた音色を、現代の作曲家および演奏家がひきだした、というほうが現実味をおびてくる。音色は、その楽器の性格を決定するものだから、楽器を弾きこなすということは、楽器の音色が十分に発揮される状態にたったことをも意味する。しかし、邦楽器の場合、その状態というのは、伝統的な調弦法による演奏の場合と、その楽器固有の機能とが、不可分にむすびついている。前者については、三味線奏者が「新作はツボにない音をつかっている」という言葉のとおり、伝統的な音階外の音は、音色がかわるのできられる。それはサワリと関係があるからである。

余談を一つ。インド古典音楽の弦楽器タンブーラにもサワリがある。弦にはさみこまれた糸が、サワリの機能をはたしている。この糸をジュワリー、とよぶ。アジア・アフリカの楽器から「サワリトーン」を除去したら、なにがのこるだろうか。サワリの効用は料理における香辛料に匹敵する、とかねがね感じているのだけど、どうでしょうか。

△今頃は、^{はんひつあん}半七様…このあとのチン、に象徴されるように義太夫は、^{ひとばち}一撥で老若男女の情・情景などを弾きわけなければならない。音高だけでない音色奏法のむずかしさがそこにある。現代邦楽の作品をかくために、こういった奏法を伝統との脈絡から離してつかうことができるのか、演奏家はゆるしてくれるのだろうか、といった問題が、昔も今も依然としてよこたわっている。

「集団」の中には、昔、古典邦楽の舞台活動に従事していた人がおおかった。そのころ、「集団」の議論に「音色」「奏法」が、かならずからんでいたのを思い出す。作曲家と演奏家が、現代邦楽に真正面からむきあっていた。創作活動に携わるといことは、既成の枠組みへのレジスタンスであることを、身をもって感じた。伝統と現代を複眼視できる環境にある「集団」に、今、古典邦楽の舞台経験者がすくないのが気にかかる。

補足を一つ。「声」の作品。「集団」の財産の中に、声楽作品（語りをふくむ）が占める割合を、私はしらない。私の試算では、声楽作品は、現代邦楽全体の15%前後となる。古典邦楽とのおおきなちがいである。現代邦楽の歴史が、邦楽器の自律的發展と、伝統的「声楽作品」からの解放のうえにあゆんできたことを、この数字が示唆している。それならばその「声」を、なんとかして現代邦楽にとりこむ戦略をたてないと、現代邦楽はあぶない。これには伝統的な「声」そのものの活用と、日本語をいかした発声法による「声」、この二つがかんがえられる。すでにこの二つの好例を、われわれはいくつかしている。しかしあまりにもすくない。

演奏家からの自発的主体的な運動意欲によって、現代邦楽は誕生し発展してきた。戦後の音楽界の誇れるトピックであろう。この「集団」にも、おおくの作曲家が参加し、洋楽演奏家との共演もひんばんになった。「集団」は、現代の「日本音楽」をつくってきた歴史のうえに、伝統とむきあった創作活動を、さらに展開してほしい。

日本音楽集団 最近の活動と今後のおもな予定 (1999年6月～2000年5月)

- 6月26日(土) 富山公演「竹取物語」 富山能楽堂
7月10日(土) 日本最古のファンタジー「竹取物語」～それを彩る音たちの世界～(豊橋市民夏期大学) 豊橋市民文化会館
7月20日(火) NHK教育番組に出演
8月17日(火) 市制百十周年記念熊本市市民会館自主文化事業 邦楽ファンタジー「竹取物語」熊本市市民会館大ホール
8月24日(火) ライオンズ・クラブ合同チャリティ・コンサート 鶴岡市文化会館
8月28日(土) 称名寺・伽藍DO '99「竹取物語」 称名寺境内
9月22日(水) 第156回定期演奏会～21世紀へのプレリュード～ 津田ホール
10月31日(日) 国民文化祭・ぎふ99「邦楽の祭典」に出演 岐阜市民会館
11月10日(水) 神奈川県立秦野南が丘高等学校公演 秦野市文化会館大ホール
11月 8日(月) 第157回定期演奏会～コンポーザーズ・プロジェクト・シリーズⅡ～
《池辺晋一郎氏からのメッセージ》 津田ホール
12月 3日(金) 駒場幼稚園「ごんぎつね」公演
12月 5日(日) 日本の楽器たちのコンサート 多聞寺
12月12日(日) 「第12回子ども邦楽まつり」に出演 東京都児童会館ホール
12月15日(水)～17日(金)
にいがた音楽鑑賞会「竹取物語」公演 新潟市民芸術文化会館コンサートホール
- 2000年
1月22日(土) 第158回定期演奏会～RI・TSU・DO～ 青山円形劇場
2月 2日(水) オーケストラと和楽器の競演vol.10 ザ・ファイナルコンサートに出演
「急の曲」(三木稔作曲)を東京交響楽団と共演 板橋区立文化会館大ホール
3月 4日(土) 松江公演「竹取物語」 プラバホール
4月 7日(金) パイロット国際会議レセプションに出演 全日空ホテル
5月17日(水) 第159回定期演奏会～コンポーザーズ・プロジェクト・シリーズⅢ～
《佐藤敏直氏からのメッセージ》 津田ホール

箏

二十絃箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、楽器の本質を追求した箏

日本音楽集団推薦

琴光堂和楽器店

東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL(3792)8481 FAX(3792)8437